

「文化」の現場を歩く

第2回

人材・施設・手法

静岡文化芸術大学教授

松本 茂章

札幌市のNPO法人 「コンカリーニョ」

◆開館10周年を迎えた小劇場

人口195万人を超える北都・札幌市では近年、行政と民間の協働によって演劇活動が盛り上がりを見せている。NPO法人コンカリーニョが運営する同名の小劇場（西区・JR琴似駅前）も重要な役割を果たした一つとされ、5月28日の土曜に訪問した。この日は2006年5月の開館から10周年の記念行事が開催されていた。玄関では女性理事長の斎藤ちず（1962年生まれ）が緑の訪問着で

正装して入場者を出迎えた。過去560以上の公演が行われた舞台上にロックバンドが出演。日本酒、白ワイン、焼きそばなどが各300円で販売され、延べ200人の観客で盛り上がった。終了時刻の午後8時、斎藤はワンピースに着替え、白鉢巻きを締めて再登壇。「10年間本当にありがとうございました。次の10年20年。まだまだ進みます」と叫び、「おー」と右拳を挙げる。観客も「おー」と応えた。市民に支えられてきた同劇場らしい光景だった。

同劇場は平土間づくりの広さ235平方メートル。高さ7メートル。舞台は間口13メートルと奥行き7メートル。最大250席を設置できる。演劇やダンスなどの自主事業のほか、貸し館として音楽会、骨董市など幅広く使われる。「近所の人たちがぶらりと訪れることができるように」と願って生活支援型文化施設と名乗った。年平均来場者2万5000人、稼働率65%に達する。本体工事費2700万円、音響照明機材費1100万円の建設資金は、国民金融公庫から1600万円、北洋銀行から500万円の融

資を受けた。市民から寄付1600万円が寄せられたほか、客席の背もたれに自分の名前を入れる「いす募金」（1脚4万円）を募った。少しでも工事費を軽減するために、照明用の通路や数キロの電気配線はNPO法人関係者で手づくりした。開館後は毎月24万4000円の返済を続けた。行事終了後、事務室に戻った斎藤はフーツと深呼吸して10年間の苦勞を思い返した。

◆アート&コミュニティセンター の運営を新たに引き受けて

斎藤は愛媛県出身。北海道大学医学進学課程に入学後、学生演劇に魅了され、医学部に進む前に中退して劇団活動に熱中した。1995年使われていなかった昭和初期の缶詰倉庫を見つけて所有者と交渉して改装、旧劇場「コンカリーニョ」を7年間運営した。しかしJR琴似駅前再開発に伴い倉庫取り壊しが決まり、2002年に活動が中断。翌03年にNPO法人を設立するとともに、地下鉄東西線琴似駅に併設されたアトースペースの切り盛りを市側から委ねられ、「ことにパ

トス」の運営を始めた。2006年以降、42階建て高層ビルの足元にある先述の新劇場を運営してきた。月額家賃54万円の15年契約だ。

NPO法人の活動は2009年に新たな段階に入る。西区から中央区に進出。中島公園近くの旧曙小学校を再利用した、あけぼのアート&コミュニティセンターの運営を同市から委託された。旧教室を演劇稽古や美術アトリエに活用。月額2万2000円〜7万円で貸したり、体育館を市民スポーツに開放したりも。近年はアニメ主人公に扮して写真撮影する「コスプレ」利用も増えてきた。町内会連合会のお祭り会場に使ってもらうときもある。家賃は毎月26万7000円。行政の補助金はなく人件費や事業費の経費は貸し館収入で賄っている。

黄色いバンダナを頭に巻いたセンター長の遠州雅樹（1953年生まれ）は仙台市生まれ。宮城高専卒業後に上京して文学座演劇研究所に入り、演出部・舞台監督コースに所属した。座員に昇格してからは舞台監督や演出部長を歴任した。文化庁派遣在外研修員として1997年

たそうだ。

◆理事の支援と地域への貢献

設立13年のNPO法人コンカリーニョに話を戻そう。2015年度の事業収入は6300万円。運営する3カ所では正

から1年間スウェーデンに滞在し研修の傍ら北欧演劇の状況を調査した。帰国後「脚本に専念したい」と決意し、パートナーの暮らす札幌に移り住んだ。市立の人形劇場に勤めているうち、縁あって同NPO法人の理事に就任、その後同センター長に誘われた。「若い演劇人たちが、うちのセンターやパトスで稽古に励んだあと、琴似駅前の小劇場コンカリーニョで公演を打つ。そんな演劇創造の一貫体制を整えたい」と職員間で話し合い、2015年から割引新料金を導入した。

◆演劇の「札幌スタイル」を求めて

東京の老舗劇団で育った遠州は札幌の演劇界に戸惑う一方、独自のスタイルに気づいた。「演劇するなら東京のプロ劇団で、と自分は上京した。対して札幌はアマチュア劇団がほとんどで演劇では生活できない。しかし別の面で恵まれている。演劇人同士の結束が強いうえ、札幌市の支援も心強い」と述べた。たとえば……と遠州が挙げたのが札幌劇場連絡会、札幌劇場祭（シアターゴウラウン

ド）、札幌演劇シーズンの三つである。

7団体10劇場が同連絡会をつくり、2006年から毎年11月に札幌劇場祭を主催する。民間劇場が切磋琢磨する形で、それぞれの〈お勧め劇団〉を披露する見本市だ。そして民間有志の呼び掛けで演劇創造都市札幌プロジェクトが立ち上がり、「当面100人のプロフェッショナルな演劇人が生活できる都市を目指す」とうたった。さらに2012年冬から札幌劇場祭を発展させて札幌演劇シーズンが始まった。札幌で生まれた演劇作品を再演する新事業で、雪まつりや夏の観光に合わせて、7月中旬と1月中旬からの各1カ月間、市内5劇場で好評だった名作を選び、それぞれ10日前後再演してもらう。実行委員会には同札幌プロジェクト、北海道演劇財団、コンカリーニョ、札幌市、市教育文化会館の5者が加わる。同実行委員会幹事と劇場連絡会事務局長をともに務める斎藤は「小劇場演劇のロングランが可能になったのは画期的なこと」と評価する。「演劇シーズンの効果が出てきて」、札幌に暮らしながら演劇で食べていきたいと願う若者が増えてき

職員6人が働き、理事2人がパート職員、5人がアルバイトで勤める。借金返済は順調だったが、事業拡大に伴い職員を増やしたこともあって新たに借り直しを行った。2013年に2100万円まで増えたものの、地道に返済して今年6月には1400万円まで減らした。支援会員数は最盛期の200人から120人に減少。ボランティア数50人は当初と同数ながら活動的なメンバーは限られる。斎藤は「立ち上げ時は手伝ってほしいことがヤマとあったが、10年を経て運営が落ち着いてきたから」と振り返る。10周年を前に主要な理事たちが札幌近くの温泉地・定山溪に合宿して話し合った。芸術文化を生かして地域に貢献するという本来の目的を指そうと再確認して、心を一つにした。

札幌駅前通りまちづくり会社社長の白鳥健志（1949年生まれ）は理事の1人である。国民金融公庫から借り入れる際に保証人を引き受けた。元札幌市職

員。同市建築部長を経て2015年同社

長に就いた。「地域のために、アートのために活動できていれば、僕自身は事業規模にこだわっていない」と語る。市関連施設の運営委託を受けていることに関しては「行政は稼働率や入場者の多寡ばかり注目するが、別の評価指標があるはず」と指摘した。

5月29日の昼。コンカリーニョの小劇場はプロレス団体に貸されていたものの、斎藤と理事の佐藤重紀子（1967年生まれ）（管理栄養士・女優）の2人は西区内の自治会館を訪れ、琴似の実話を題材にしたNPO主催の恒例オリジナル音楽劇の練習を指導した。今年の公演は「コンカリーニョ誕生秘話」。女子児童から70代男性まで幅広い年代の47人が参加して、6月25、26日に同小劇場で上演された。1995年の倉庫劇場以来、琴似に根付いて20年余……。地元可愛さで計73社・団体が協賛金を寄せ、全4ステージの切符は完売した。（敬称略）



高層ビルの足元に設けられた小劇場「コンカリーニョ」の外観

まちとアートを結ぶ拠点づくり